

青年期の親準備性

—子育て経験者との比較—

中嶋律子¹⁾, 後藤宗理²⁾

要 約

子育て経験者との違いから、近い将来親になる可能性のある青年期男女の親になることへの意識の特徴を明らかにすることを目的に、青年期男女684名と保育園・小学校に通う子どもをもつ親(子育て経験者)923名を対象にアイデンティティと親準備性に関する調査を実施した。有効回答の得られた青年422名と子育て経験者224名について分析した結果、子育てを経験している男女にくらべ、青年では子育てへのイメージから親になることへの意識が形成されているために、親になることの意義よりも、子どもの養育や親になることへの要件への意識が高く、親になることへの負担感や不安感を抱いているという特徴が明らかになった。また、アイデンティティの基礎となる基本的信頼や自律性が十分に確立されていない男女では子育てへの負担感や不安感が強くなることが示唆された。

キーワード：青年期、子育て、認識

I. 緒 言

次世代育成支援は今やわが国における重要な施策の一つとなり、近年では次世代を育む親になるための支援として、親になるための出会いやふれあい、子どもの生きる力の育成と子育てに関する理解の促進が盛り込まれるなど、子育て中の親に焦点をあてた支援から、子育ての準備期にある青年期の男女をも含めた支援へとその対象が拡大されてきている。

我が国においては、1982年に岩田ら¹⁾によって初めて「親準備性」という概念が示されて以来、親になる準備段階にある青年期の男女を対象として、親になることへの意識や態度、子育てに対する知識などについて研究が行われてきた。その結果、高校生よりも大学生など年齢が高くなるほうが子どもや子育てに関心を抱いていたり、子どもに対して好感情を抱いていたりすること²⁾、乳幼児に接した経験^{3), 4), 5), 6)}や望ましい家族関係³⁾が子育てに対する意識に影響を及ぼしていることが指摘されている。しかし、これらの先行研究では、親準備性を「将来子どもを育てるための資質」という側面から捉え、子育てへの関心や子どもへの感情を中心に検討が行われているのみで、現代の若者自身が親になることをどのように認識しているのかについては十分な検討がなされていない

状況である。

本研究の目的は、青年期、中でも青年後期の親準備性への支援のあり方を検討するため、子育て経験者との違いに着目し、近い将来親になる可能性のある大学生男女の親準備性の特徴を明らかにすることである。

II. 用語の定義

親準備性は、「望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期(青年期)における、価値的・心理的態度や、行動的・知識的側面の準備状態を意味している」と岩田ら¹⁾によって定義されているように、子育てに関する態度や知識だけでなく、親としてのアイデンティティ形成に関する準備状態などの側面を含んでいる。そこで本研究では、親準備性を子どもの受け入れや親としてのアイデンティティ形成などの価値的・心理的側面から捉え、青年の親になることへの意識とした。

III. 研究方法

1) 調査期間と対象

2008年4月から5月に調査を実施した。対象は、関東・中部地区3都県内5大学の人文社会・教育・理工

1) 名古屋市立大学看護学部

2) 名古屋市立大学大学院人間文化研究科

系学部の大学生男女619人と関東・中部・関西地区在住の20歳代前半で独身の社会人65人の計684人（以下、青年とする）と、中部地区の保育園・小学校に通う子どもをもつ親（以下、子育て経験者とする）923人である。青年の440人（回収率64.3%）と、子育て経験者の230人（回収率24.9%）から回答を得た。

2) 調査方法

調査は、属性に関する質問項目と、親準備性尺度⁷⁾、アイデンティティ尺度⁸⁾で構成した自己記入式の質問紙を用いて実施した。親準備性尺度は、親としてのアイデンティティ形成という観点から青年の親になることへの意識を評定するために研究者が作成した尺度⁷⁾で、親になることへの意識に関する43の質問項目からなる4段階のリッカート尺度である。質問紙は、大学生は学内の回収箱への投函によって、社会人と子育て経験者は郵送によって回収した。

3) 分析方法

尺度に未回答項目のあったものと年齢が無回答もしくは30歳代の男女を除く、青年422人と子育て経験者224人を分析の対象とし、因子分析（主因子法）とt検定、相関分析を行った。分析にはSPSS 15.0J for Windowsを使用した。なお、子どもへの関心については複数の研究で男女差が認められることが報告されている^{2), 3), 4), 9), 10)}が、その他の側面については、現在のところ男女差は報告されておらず、今回の調査では直接子どもへの関心を問うような項目は含まれていないことから、男女を合わせて分析することとした。

4) 倫理的配慮

調査は無記名で行い、大学生には文書と口頭で、社会人と子育て経験者には文書で研究の目的や、調査への協力は自由意志によって決定し、調査への協力に同意をする場合のみ回答すること、協力しない場合にも一切の不利益を被らないこと、質問紙への回答をもって調査協力への同意とみなすことなどを説明した。なお、調査は名古屋市立大学人間文化研究科倫理委員会の承認を得て実施した。

表1 対象の属性

	男女比 人数(%)		年齢 (平均±SD)
	男	女	
青年 (n=422)	男性	164(38.9%)	19.4 ± 1.5歳
	女性	257(60.9%)	
	無回答	1(0.2%)	
子育て経験者 (n=224)	男性	53(23.7%)	35.2 ± 7.0歳
	女性	171(76.3%)	

IV. 結果

1) 対象の属性

男女の割合は、青年では男性164人（38.9%）、女性257人（60.9%）、子育て経験者では男性53人（23.7%）、女性171人（76.3%）という結果で、いずれも女性の割合が高くなっていた。

年齢は、青年が平均19.4歳（標準偏差1.5）、子育て経験者は35.2歳（標準偏差7.0）であった。その他、子育て経験者の子どもの平均人数は2.0人（標準偏差0.9）で、第1子の平均年齢は4.8歳（標準偏差5.3）であった。

2) 青年と子育て経験者の比較

アイデンティティについて見ると、表2に示したとおり、[アイデンティティの基礎]の得点の平均が青年で23.07（標準偏差5.53）、子育て経験者では27.91（標準偏差5.86）、[アイデンティティの確立]の得点の平均は青年で26.34（標準偏差5.21）、子育て経験者では27.45（標準偏差4.80）といずれの下位尺度においても子育て経験者の得点が有意に高かった。

次に、子育て経験者について親準備性尺度の質問項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った結果を表3に示した。表4に示した親準備性尺度と比べると、ほぼ同様の構造となっていたため、各因子には、親準備性尺度の下位尺度と同じ因子名を命名した。各因子を構成する項目を見ると、青年では[子どもの養育]に含まれていた「子どもの成長を見守り支えになること」「子どもに愛情を持ち大切にす

表2 青年と子育て経験者のアイデンティティの比較

	青年 (平均±SD) n=422	子育て経験者 (平均±SD) n=224	有意差
アイデンティティ			
アイデンティティの基礎	23.07 ± 5.53	27.91 ± 5.86	***
アイデンティティの確立	26.34 ± 5.21	27.45 ± 4.80	**

** : p<0.01, *** : p<0.001

表3 子育て経験者の親準備性尺度項目の因子分析結果(主因子法、バリマックス回転後)

	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
第1因子:親になることの意義 ($\alpha=.89$)						
人生が豊かになる	.73	-.02	-.12	.26	.07	.61
楽しいこと	.69	-.12	.04	.19	-.07	.53
子どもの成長を楽しみ、幸せを感じる	.69	-.04	.02	.12	.07	.49
幸せなこと	.64	.01	.13	-.02	.10	.43
自分の親への感謝の気持ち生まれる	.62	.17	.15	-.01	.02	.43
生き甲斐を得ること	.61	.06	.21	.14	.25	.50
かけがえのない喜び	.58	-.08	.14	-.03	.19	.39
自分のことを必要とする人ができるということ	.52	.20	.19	.20	.11	.40
*子どもの成長を見守り支えになること	.51	.05	.29	.11	-.08	.37
*子どもに愛情を持ち大切にすること	.50	.07	.29	.24	-.09	.41
価値ある立派なこと	.49	.10	.14	.28	.30	.44
自分自身も成長する機会	.49	-.01	.05	.08	.16	.27
*子どもを尊重する気持ちが必要	.48	.03	.20	.24	-.02	.32
家族が増えること	.44	.07	.09	.19	.17	.27
第2因子:親になることへの負担感・不安感 ($\alpha=.82$)						
自由が制限される	.09	.78	-.02	.00	-.09	.62
漠然とした負担感を抱く	-.19	.70	-.07	-.04	.23	.58
心身の実質的負担を被る	-.01	.64	.12	.11	.07	.45
時間的制約が生じる	.23	.59	.01	.09	-.14	.42
忍耐力がある	.14	.54	-.03	.16	.03	.34
漠然とした不安を感じる	-.22	.54	.09	.11	.27	.43
子どもの人生を背負うことへの負担感がある	-.15	.48	.25	.00	.13	.33
自制することが求められる	.22	.46	.26	.15	-.09	.36
経済的負担がある	.03	.45	.12	.21	-.01	.26
第3因子:子どもの養育 ($\alpha=.84$)						
子どもを育てる使命感をもつこと	.19	.11	.64	.10	.26	.54
子どもを育てる覚悟が必要	.08	.34	.57	.16	.15	.49
子どもを育てる自覚が必要	-.05	.09	.53	.06	.29	.38
子育てを放棄しないこと	.17	-.02	.52	.16	.03	.32
子どもの命や成長、人生に責任をもつということ	.35	.08	.50	.29	-.05	.46
子どもをしつかり教育できることが必要	.03	.27	.49	.37	.19	.49
子どもを責任をもって育てること	.21	.22	.47	.47	-.08	.54
責任が増すこと	.08	.04	.43	.02	.14	.22
子どもを守ること	.19	-.07	.43	.04	-.11	.24
自分のことに加えて子どものことにも責任をもつこと	.35	.36	.39	.29	-.05	.49
家庭をつくりパートナーや子どもを支えること	.29	.27	.35	.15	.26	.38
第4因子:親になることへの要件 ($\alpha=.80$)						
社会的モラルをもつことが必要	.09	.10	.30	.64	.05	.52
人間性が求められる	.25	.08	.19	.60	.15	.49
子育てについて学んでいく姿勢が必要	.31	.20	-.01	.58	.19	.50
常識を持ち、世間を知ることが必要	.14	.24	.32	.58	.09	.52
優しさや気づかいがある	.40	.18	.09	.51	.04	.47
第5因子:世代の継承 ($\alpha=.75$)						
自分の子孫を残すこと	.15	.02	.29	.07	.54	.40
自分が受けた命をつなぐこと	.36	.02	.17	.08	.53	.45
次世代の担い手の育成	.34	.14	.17	.25	.51	.49
*自分の学習の機会	.38	.11	-.08	.39	.39	.46
因子寄与	6.12	3.86	3.61	3.08	1.85	
因子寄与率	14.22	8.97	8.39	7.16	4.29	
累積寄与率	14.22	23.19	31.58	38.74	43.03	

注:*を付した項目は、青年期の親準備性尺度とは異なる因子に移動した項目

表4 親準備性尺度

項	目
第1因子：親になることの意義	幸せなこと 人生が豊かになる 楽しいこと 生き甲斐を得ること かけがえのない喜び 子どもの成長を楽しみ、幸せを感じる 自分が必要とする人ができるということ 価値ある立派なこと 自分自身も成長する機会 自分の学習の機会 家族が増えること 自分の親への感謝の気持ちが生まれる
第2因子：子どもの養育	子どもを育てる自覚が必要 子どもを守ること 子どもを、責任をもって育てること 自分のかつに加えて子どものことにも責任をもつこと 子どもを育てる覚悟が必要 子どもに愛情を持ち大切にすること 子どもをしつけたり教育できることが必要 子どもを育てる使命感をもつこと 子どもの命や成長、人生に責任をもつということ 責任が増すこと 子育てを放棄しないこと 家庭をつくりパートナーや子どもを支えること 子どもの成長を見守り支えになること 子どもを尊重する気持ちが必要
第3因子：親になることへの負担感・不安感	漠然とした負担感を抱く 自由が制限される 漠然とした不安を感じる 心身の実質的負担を被る 時間的制約が生じる 忍耐力がある 経済的負担がある 子どもの人生を背負うことへの負担感がある 自制することが求められる
第4因子：親になることへの要件	人間性が求められる 社会的モラルをもつことが必要 優しさや気づかいがある 子育てについて学んでいく姿勢が必要 常識をもち、世間を知る必要がある
第5因子：世代の継承	自分が受けた命をつなぐこと 自分の子孫を残すこと 次世代の担い手の育成

こと」「子どもを尊重する気持ちが必要」が、子育て経験者では「親になることの意義」に含まれていた。また、親準備性尺度では「親になることの意義」に含まれる「自分の学習の機会」が、子育て経験者では「親になることの意義」で.38、「親になることの要件」で.39、「世代の継承」で.39と3つの因子で同程度の因子負荷量を示してはいるものの「世代の継承」に含まれているなどの違いが認められた。

なお、今回の調査対象となった青年で親準備性尺度の各下位尺度について α 係数を算出した結果、「親になることの意義」では.89、「子どもの養育」では.88、「親になることへの負担感・不安感」では.83、「親になることへの要件」では.79、「世代の継承」では.70といずれも高い値を示しており、本調査においても親準備性尺度の内的整合性が確認された。

青年と子育て経験者での親準備性尺度の得点を比較するため、親準備性尺度の下位尺度ごとの合計得点を、青年と子育て経験者それぞれで算出した。下位尺度ごとに検定を行った結果、表5に示したように、「親になることへの意義」では青年が平均39.00点（標準偏差6.09）、子育て経験者が40.25点（標準偏差5.43）と子育て経験者のほうが高くなっていた。「子どもの養育」、「親になることへの負担感・不安感」、「親になることへの要件」では青年のほうが高く、「世代の継承」では有意な差は認められなかった。

さらに、青年と子育て経験者それぞれについて、親準備性尺度とアイデンティティ尺度の相関分析を行った結果、表6に示したように、青年ではアイデンティティの両下位尺度と親になることへの負担感・不安感の間に弱い負の相関が認められた。一方、子育て経験者では、アイデンティティの基礎と親になることへの負担感・不安感との間に比較的強い負の相関が、そして、アイデンティティの確立と、親になることの意義と親になることへの要件との間に弱い正の相関が認められていた。

表5 青年と子育て経験者の親準備性尺度（下位尺度得点）の比較

	青年 (平均±SD) n=422	子育て経験者 (平均±SD) n=224	有意差
親準備性尺度			
親になることの意義	39.00 ± 6.09	40.25 ± 5.43	**
子どもの養育	50.62 ± 5.01	49.07 ± 5.07	***
親になることへの負担感・不安感	27.13 ± 4.51	25.53 ± 4.39	***
親になることへの要件	17.51 ± 2.25	16.59 ± 2.51	***
世代の継承	7.95 ± 2.01	7.90 ± 2.14	ns

** : p<0.01, *** : p<0.001

表6 アイデンティティと親準備性の相関

	親になること の意義	子どもの 養 育	親になること への負担感・ 不安感	親になるこ とへの要件	世代の継承
青年 (n=422)					
アイデンティティの基礎			-.36***		
アイデンティティの確立			-.20***		
子育て経験者 (n=224)					
アイデンティティの基礎			-.43***		
アイデンティティの確立	.23***			.21***	

***: p<0.001

V. 考 察

子育て経験者のほうがアイデンティティ尺度のいずれの下位尺度においても得点が高くなっていったことは、「自我同一性」から「生殖性」の段階へと発達段階¹¹⁾が進んでいるため、当然の結果と言えよう。

親準備性尺度では「子どもの養育」に含まれていた3項目が、子育て経験者では「親になることの意義」に含まれていた点については、青年は親になることをイメージして回答しているために、「親になることの意義」として親になることが自分自身にもたらすメリットと評価している部分と、「子どもの養育」という親としての機能と捉えている部分となっていたのに対し、子育て経験者では、現在の子育てを通して実感している「親になることの意義」と、親として子どもを育てる使命感としての「子どもの養育」となっていたため、違いが生じたのではないかと考えられる。柏木ら¹²⁾は親になった男女では子育てへの肯定感が高いと述べており、今回の結果でも、子育て経験者が子どもを育てる中で意義を見出してきた結果として、親準備性尺度の下位尺度の「親になることの意義」の得点が青年よりも有意に高くなり、親になることをイメージしているだけの青年では、子どもの養育や親になることへの要件を強く意識している一方、負担感や不安感も強くなっているのではないかと考えられた。これは、青年期の特質として将来への熱意ある期待感と将来に関する不安感が挙げられている¹³⁾ことから、青年期の特質からくるものであると考えられた。

次に、アイデンティティと親準備性との関係を検討した結果では、「親になることへの負担感・不安感」とアイデンティティの基礎との間に、青年では弱い、子育て経験者では比較的強い負の相関が認められた。子育て経験者では、「親になることの意義」と「親になることへの要件」とアイデンティティの確立との間にも弱い正の相関が認められていたが、青年では認められなかった。下山⁸⁾は、アイデンティティの基礎を対人場面における

不安や孤独感など情緒的安定に関する内容で基本的信頼や自律性といったアイデンティティの基礎に関わるものであるとしている。Erikson¹¹⁾は、発達段階の各々のステップはそれ以前の全てのステップに根をおろしていると述べており、早期の発達課題である「基本的信頼 対 基本的不信」や「自律性 対 恥・疑惑」が達成されていないことが、成人期のそれである「生殖性 対 停滞」の達成状況に影響を及ぼしているのではないかと考えられた。ここでいう「生殖性」とは産むことを意味する包括的なものであり、世代から世代へと産まれてゆくあらゆるものを意味しており¹⁴⁾、その1つに子どもがある。また、成人期の徳である「世話」は、愛、必要あるいは偶然によってもたらされるところのものに対して広がる関心で、それは取り消すことのできない義務に付着する両面価値 (ambivalence) に打ちかつことである¹⁵⁾ように、アイデンティティが確立されていると「親になることへの意義」を強く感じられるようになるが、それ以前の基本的信頼や自律性が達成されていないと、親になることに伴う負担感や不安感を強く感じるようになるのではないかと考えられた。

以上のことから、親になることへの意義が親になることへの負担感や不安感を上回るようにするためには、青年期から乳幼児との接触の機会を設けるというような子どもへの関心を持たせる介入だけではなく、エリクソンの発達段階では早期の発達であり、青年期にその再確立が進むとされている基本的信頼や自律といったアイデンティティの基礎に関わる側面の発達を促すような支援が必要であると考えられた。

加えて、親準備性尺度と、今回の子育て経験者の親準備性尺度の質問項目の因子分析の結果を比較すると、両者では異なる因子に含まれる項目が4項目あったものの、ほぼ同様の因子構造を示しており、親準備性尺度は、子育てをすることに伴う意識を反映していると考えられた。

VI. 結 語

子育てを経験している男女にくらべ、青年では子育てへのイメージから親になることへの意識が形成されているために、親になることへの意義よりも、子どもの養育や親になることへの要件などへの意識が高く、親になることへの負担感や不安感を抱いているという特徴が明らかになった。また、アイデンティティの基礎となる基本的信頼や自律性が十分に確立されていない男女では子育てへの負担感や不安感が強くなることが示唆された。

謝 辞

調査にご協力くださいました皆様に深謝いたします。

文 献

- 1) 岩田崇, 秋山泰子, 井上義朗, 深谷和子: 青年期の親準備性に関する研究 (研究代表者小林登, 「母子相互作用の臨床的・心理・行動科学的ならびに社会小児科学的意義」に関する研究), 昭和57年度厚生省心身障害研究報告書, 466~467, 1982.
- 2) 滝山桂子, 斉藤一枝: 中学生・高校生・大学生の親準備性の実状, 秋田大学教育学部研究紀要, 教育学, 52, 39~46, 1997.
- 3) 牧野カツコ, 中西雪夫: 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (1~3), 日本家庭科教育学会誌, 32 (2), 51-66, 1989.
- 4) 岡本祐子, 古賀真紀子: 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析, 広島大学心理学研究, 4, 159-172, 2004.
- 5) 松岡知子, 堀内寛子, 山中亜紀, 伊藤倫子: 男女大学生の親になることに関する意識, 母性衛生, 41 (4), 398-404, 2000.
- 6) 松岡治子, 和田佳子, 花沢成一: 青年期男女における母性度・父性度の発達に関する要因の検討, 母性衛生, 41 (4), 500-505, 2000.
- 7) 服部律子: 親準備性尺度作成の試み, 思春期学, 26 (4), 428-432, 2008.
- 8) 下山晴彦: 大学生のモラトリアムの下位分類の研究, 教育心理学研, 40 (2), 121-129, 1992.
- 9) 伊藤葉子: 中・高校生の親準備性の発達, 日本家政学会誌, 54 (10), 801~812, 2003.
- 10) 松岡治子, 和田佳子, 花沢成一: 青年期男女における親性準備性の性差および母性度・父性度の発達, 母性衛生, 41 (4), 492~499, 2000.
- 11) Erikson E.H.: Child and Society (2nd Ed.), W.W. Norton & Company, 1963, 仁科弥生訳, 幼児期と社会1, みすず書房, 東京, 1977.
- 12) 柏木恵子, 若松素子: 「親となる」ことによる人格発達, 発達心理学, 5 (1), 72-83, 1994.
- 13) Coleman J. C. & Hendry L.B.: The Nature of Adolescence (3rd Ed.), Routledge, 1999, 白井利明他訳, 青年期の本質, 1-24, ミネルヴァ書房, 京都, 2003.
- 14) Evans, R. I. (Ed.): Dialogue with E. H. Erikson, Harper and Row, New York, 1967, 岡堂哲雄, 中園正身訳, エリクソンは語る, 新曜社, 東京, 1981.
- 15) Erikson, E. H.: Insight and responsibility, W. W. Norton, New York, 1964, 鎌幹八郎訳, 洞察と責任, 誠信書房, 東京, 1972.
(受稿 平成20年10月28日)
(受理 平成20年12月10日)

Comparison of the Views held by Adolescents and Child-rearing Adults on Parenting

Ritsuko NAKAJIMA¹⁾, Motomichi GOTO²⁾

1) Nagoya City University School of Nursing

2) Nagoya City University Graduate School of Humanities and Social Sciences

Abstract

The purpose of this study is to highlight the characteristics of the views on parenting during adolescence by comparing adolescents with child-rearing male and female adults. The Identity Scale by Shimoyama was used to construct the questionnaire, and the questions were relevant to views on parenting. The questionnaire was distributed to 648 male and female adolescents and 923 male and female parents. The results of the analysis show that adolescents tend to think a lot about child bearing and the requirements of becoming parents. In addition to this, the anxiety to become a parent was caused mainly by their image of parenting. Further, it was determined that adolescents who lacked basic trust or autonomy were more anxious about becoming parents.

Key Words: adolescence, parenting, cognition